



マイナーな言語を研究すること、学ぶこと、その意義

長崎 郁 (言語学)

私はユカギール語という北東シベリアの少数民族の言語を主に研究しています。そんな遠いところで話されている言語をなぜやっているのですかとよく聞かれますが、きっかけは、大学時代にいわゆるマイナーな言語について各自が調べて発表するという授業でユカギール語を担当したことにあります。そして、もともとシベリアという地域に漠然と憧れていたということもあり、実際に話されているところに行ってみたくと強く思うようになりました。大学院に進学してからは現地でフィールドワークを行うようになり、今に至っています。

名古屋大学文学部には一年半前に赴任し、言語学分野のいくつかの授業を受け持っています。そのひとつ、「個別言語演習」では、昨年度と今年度は、英語で書かれたエスキモー語の文法書を皆で読み解きながら勉強してきました。この言語は、動詞が主語と目的語の両方に合わせて人称変化したり、「能格性」「複統合性」と呼ばれる、日本語や英語などにはない珍しい文法現象があったりと、学生の皆さんは最初のうちは少々びっくりしますが、最終的には全員がひとつひとつの文を分析して日本語に訳すことができるようになります。



このような珍しいマイナーな言語を研究したり勉強したりすることは、「実学」とは遠く、その意義が分かりづらいものですが、私自身は何よりもまず、我々がなんとなく持っている言語に対する思い込みを打ち砕き、世界には本当にさまざまな言語があるのだと実感することにあると思っています。人間の本質を理解するという人文学の目標に到達する第一歩でもあります。そんな体験を学生の皆さんと共有したいと考えながら、授業を行なっています。

シベリア・ユピック語の教材から：NAAVAMUN PILGHIIT [Going to the Lake] (written by Vera Oovi Kaneshiro/Illustrated by Clyde T. Kaneshiro. The Eskimo Language Workshop, Center for Northern Educational Research, University of Alaska. Fairbanks, Alaska. 1974)

分野・専門紹介-File 79

西洋史学研究室 ～歴史を研究するということ～

分野・専門名：西洋史学

皆さんは世界史の授業は好きですか？ 嫌いな人もいると思いますし、好きな人もいるかと思います。

では、大学で学ぶ歴史学とはどのようなものか、皆さんは知っていますか？ やはり、大学というのは研究機関であるので、歴史的事実を知識として覚える……というのではなく、歴史的事実に対する研究というものが主眼となっています。例えば、「この出来事はどうして起こったのか」という問いに対して様々な解釈を提供したり、あるいは、「この出来事は本当に起こったのか」という問いに対して思考を巡らせたり

……といった感じです。もしかすると、そういった研究によって、教科書に書いてある知識が簡単に変わることもあるのです。そう思うと、なんだかワクワクしてきませんか？

名大の西洋史学研究室では、アジアを除いた地域の歴史をそういった研究の対象としています。この研究室の特色は、計7名の教授陣が配属しており、時代は古代から近現代まで、地域はギリシア・ローマからドイツ、フランス、アメリカなど、幅広くカバーしていることです。自分の興味のある時代、地域がどこであれ、豊富な支援を受けることができます。



4年生の卒論構想発表会を兼ねた合宿（2019年4月）

また、研究室内の雰囲気も大変和気あいあいとしており、先輩後輩、学部生や大学院生を問わず、盛んに交流が広がられています。現在はコロナ禍のために行えていませんが、研究室合宿や、クリスマスパーティなど、楽しいイベントも目白押しです。

この研究室の魅力が少しでも伝わったなら幸いです。少しでも興味を持ったなら、是非この研究室の門を叩いてみてください。

（学部4年・金澤 昌慶）

分野・専門紹介-File 80

漢詩に関心を持った芥川龍之介

分野・専門名：日本文学

私は芥川龍之介の漢詩について研究しています。芥川龍之介は日本近代小説の名手で、俳句や短歌、詩、漢詩などの作品を残しています。彼の小説は長年、愛読されていますが、詩作品はあまり知られていないようです。私は芥川の漢詩を考察することで、芥川文学の全貌を把握し、芥川の作家像を明らかにすることを目指しています。

芥川龍之介が漢詩を書いていたと始めて耳にする人がいるかもしれませんが、その原因は彼の書いた漢詩の数の少なさにもあります。現存する芥川龍之介の漢詩は34首に過ぎず、その多くが書簡に点在しています。しかし、芥川全集に記載されている最初の漢詩は大正元年に友人宛の手紙に書かれたもので、彼は晩年まで漢詩の創作を続けていました。ほかの文章の中には漢詩と中国の詩人らに関する記述もあり、漢詩からの影響を受けていると考えられます。大正時代には漢文ブームが衰退していたにもかかわらず、芥川は漢詩に大きな関心を示しています。中国の古典文学に親しみを持ち、漢文の教養が深い芥川龍之介は漢詩から何を得て、私生活や作家生活に投影していたのでしょうか。これは私にとって大変興味深い話です。今後も、漢詩創作が日本文学の巨匠である芥川龍之介にとって意味することを考えていきたいと思えます。

私は日本の文化に興味を持って、日本に留学してきました。日中両国は一衣帯水の隣国で、文化交流の歴史が非常に長いです。漢詩は日中文化交流の大きな成果の一つだと言えます。日本人が漢詩をどのように受容して詠んできたのかを考えることで、日本文化の源流を探求していきたいと思っています。

（博士前期課程 [令和2年度修了]・許 琳迎）

最近の文学部

新しい編集担当

月刊名大文学部の編集担当が交代しました。よりよい紙面を目指します。(SI)